



国際性を育成する学外研修の重要性と その活性化に向けて

遠山道子

概要

大学の正課外教育の充実と、正課と正課外の密接な連動の「見える化」が重要視されている。2014年に文教大学経営学部が創設されて以来、筆者は、学部生の国際性の啓発を目的とした3つの正課外の研修の整備・実施に携わってきた。これらの研修に共通するのは、1) 正課教育で学習・練習した「知識と技能」を学外で「活用」できる場であり、2) 英語と異文化の多様なインプットとアウトプットの機会が与えられ、3) 正課教育の制限を受けず柔軟なコンテンツを整備することができる、という点である。本稿の目的は、これら正課外の学外研修を正課の英語科目と比べ、その違いと意義を明確にし、両者の密接なつながりを示すことである。

キーワード：正課外教育、国際性啓発、異文化教育、英語教育、コンピテンシー

(受理日 2016年11月16日)

文教大学経営学部

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

Tel 0467-53-2111(代表) Fax 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

国際性を育成する学外研修の重要性と その活性化に向けて

遠山道子*

1. はじめに

大学の正課外教育の充実と、正課と正課外の密接な連動の「見える化」が重要視されている。その背景には、2000年6月に旧文部省の「大学における学生生活の充実に関する調査研究会」が公表した『大学における学生生活の充実方策について－学生の立場に立った大学づくりを目指して－』と題する報告書がある。この報告書では、昨今の大学生を「自由で豊かな時代を生きながら、他者とのつながりを希薄化させ、心の悩みに遭遇するなど新しい問題に直面している」とし、今後の大学のあり方については「教員の研究に重点を置く『教員中心の大学』から、多様な学生に対するきめ細かな教育・指導に重点を置く『学生中心の大学』へと、視点の転換を図ることが重要」とされている。学生の多様化の他にも、少子化や、大学外の学習の場の増加といった問題があり、これからの大学は「より厳しい競争的環境の中で」生きていかなければならない。そのために大学は、「互いに切磋琢磨しながら、個性が輝く大学づくりを目指して取り組む」必要があると書かれている。具体的に求められていることは、大学では「知識を教授するのみならず」、教職員が学生と積極的にふれあい切磋琢磨し、正課教育と正課外教育において「学生が社会との接

点を持つ機会を多く与えたり、また、学生の自主的な活動を支援するなど、各大学がそれぞれの理念や教育目標を踏まえ」た取り組みである。

この報告を受けた大学側には、大学教育の転換を実現するために、従来は正課教育を補完する機能とされてきた正課外教育の意義を捉え直し、そのあり方を積極的に見直す必要が生じている。これに従い、特色ある正課外教育の取り組みを行う大学が出てきた。例えば、金沢工業大学では「正課×正課外」の連携に力を入れ、学生が正課で身につけた「学力」を正課外の活動で活用し「人間力」を強化する環境を提供している。具体的には、産学共創プロジェクト活動や、学生が職員とともに働く「学生スタッフ制度（学内インターンシップ）」等を整備してきた。こうした「正課×正課外」の連携教育システムには、学生が持つ能力や意欲を引き出し、主体的な学びを促し、人間としての成長を「大きく後押し」していると考えられる（大澤，2015）。もう一つ例を挙げる。愛媛大学では学生の能力育成のステージを「正課教育」「準正課教育」「正課外活動」の3つに分類している。「正課教育」は卒業要件として求められる正規の授業を通じて実施され、「正課外活動」はクラブやサークルを指し、両者の中間的な位置を占める場面で教職員が提供する多様な学びの場を「準正課教育」(co-curricula)と称し、「卒業要件には含まれない、あるいは単位付与を行わないが、愛媛大学の教育戦略と教育的意図に基

* 文教大学経営学部経営学科

✉ toyama3@shonan.bunkyo.ac.jp

表1 本学部の国際性啓発を目的とした学外研修の概要

研修名	研修地	日程	学年
英語・英国文化体験研修	British Hills (福島)	2泊3日	1
Advanced Program	湘南国際村 (神奈川)	2泊3日	2-3
北米企業研修	New York (アメリカ)	7泊9日	2-3

づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動」と定義している(村田・小林, 2015, p. 51)。愛媛大学の準正課教育には、リーダーシップ育成を目的とした「愛媛大学リーダーズ・スクール」における授業・合宿研修・地域連携プロジェクトや、学内ボランティア、学習アドバイザー制度、さらには留学や就職セミナーも含まれる。

2014年開設の文教大学経営学部においても、多様化する学生の個性や能力やニーズに対応する為、様々な正課外の教育プログラムが整備されてきた。しかし、各プログラムの教育目標設定は明確になされているとは言い難い。また、正課と正課外教育の密接な連動の「見える化」(=可視化)は手つかずの状態である。

そこで本稿2章では、学部生の国際性啓発を目的とした学外研修に焦点を合わせ、筆者が整備・実施に関わった「英語・英国文化体験研修」「アドバンスト・プログラム」「北米企業研修」について報告する。続いて3章では、「北米企業研修」に的を絞り、研修後に学生に課したレポートを分析することで、学外研修の効果や重要性を明示する。4章では、3つの学外研修を正課の英語科目と照らし合わせ、明快な目標を設定する。ここでは3章で考察したレポートの分析結果も反映する。そして最後に、正課と正課外教育の潜在的な関係の可視化を試みる。

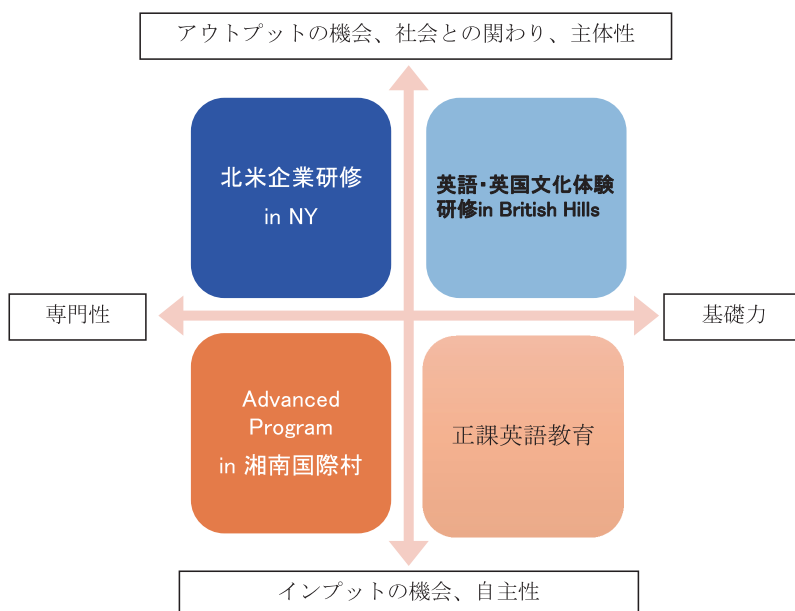
2. 3つの学外研修

はじめに、経営学部の3つの学外研修の概略を述べる。それぞれの名称、研修地、日程、対象とする学年を表1に示す。

「英語・英国文化体験研修」(以下、BH 研修)は、神田外語学院が運営するリゾート施設「British Hills」で実施している。ここには一般の旅行者も訪れる為、建物・施設・街並みは、大変美しく、風情のある英国式に造られている。また、レッスン講師および施設スタッフの殆どは英国および英国連邦出身者である為、施設内の公用語は英語と言って差し支えない。筆者は本研修の教育目標と育成すべき能力を踏まえて、事前に研修カリキュラムを考案し、現地講師・スタッフへの周知・協力依頼を行い、学生に「イマージョン教育」(浸す(=immersion)ように英語漬けにする教育方法)に近い体験をしてもらうよう努めた。本研修は異文化交流の入り口として位置づけ、1年生での参加を推奨していく。

「Advanced Program」(以下、AP 研修)は、国際カンファレンスや研修用施設として知られる湘南国際村で実施している。2015年度は、本学と他大学の教員5名により、経済学・会計学・ファイナンス・経営学・ビジネスコミュニケーションの5科目が全て英語で教授された。英語教育の視点で眺めると、ヨーロッパで普及

図1. 学外研修と正課英語教育の特徴



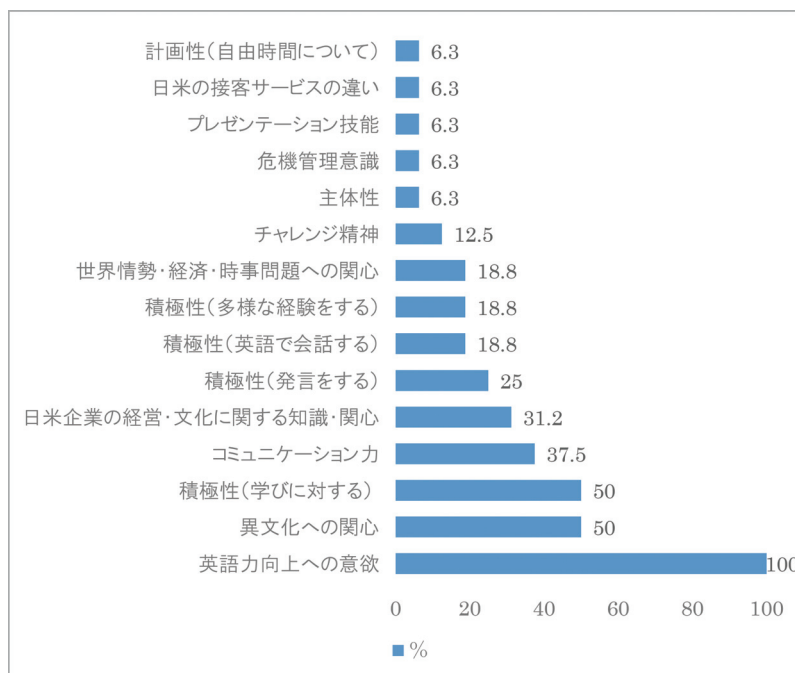
している CLIL (Content and Language Integrated Learning、クリル) という教育法を用いた研修と言える。クリルとは、歴史や生物などの教科学習と語学学習を統合した教育アプローチである。教科内容を題材に様々な言語活動を行うことで、教科内容と英語の4技能を同時に高めることができ、教育の質的向上をもたらすものと期待されている (e.g., Bentley, 2010; 池田, 2014)。AP 研修は、上述の BH 研修と比べると、博士号を持つ英語母語話者もしくはバイリンガルの教員が専門用語を使い、内容の濃い授業を展開していく為、正課の専門科目を履修している2年生以上での参加を推奨していく。

「北米企業研修」(以下、北米研修)では、米国ニューヨーク市マンハッタンに1週間滞在し、メリルリンチ証券会社などの北米企業と、アメリカ大戸屋のように北米に進出している日本企業を訪問し、講義・プレゼンテーション・社内見学・質疑応答などを体験する。数回にわ

たる事前研修では、パスポートとESTA取得の案内、海外渡航における危機管理に関する講義、日米企業比較の事前調査・発表を課す。研修後は、レポートなどの課題を必須とする。

以上が経営学部の3つの学外研修の概要である。各研修は、国際性啓発という共通の目的を持つものの、学生に提供する機会や経験は、それぞれ特徴的である。図1に示すように、正課英語教育では、知識や技能のインプットの機会が多く、基礎力と、自主性の訓練に主眼を置く。1年次での参加を推奨するBH研修では、知識や技能のアウトプットの機会を多く与え、社会と関わり基礎力と主体性を深める場を提供する。2-3年次に参加推奨のAP研修は、授業形式である為、専門知識と技能のインプットが多くなる。同じく2-3年次推奨の北米研修は、より専門的な知識にふれる機会を増やすという点ではAP研修と同じであるが、異文化社会との関わりを通してアウトプットの機会と主体性を磨く場を提供するという点が特徴的であ

図2 北米企業研修レポートに記された知識・技能・態度に関する語句と、各語句を記した人数比



る。

3. 北米企業研修後のレポート

本章では、北米企業研修に的を絞り、研修後に学生が提出したレポートの分析を通して、学外研修の効果を明示する。レポート課題は、研修に関する10の自由記述式の問いを含む。回答者は参加者全員で16名であった。

はじめに、全レポートを概観し、研修参加者が使用した知識・技能・態度に関する語句を抽出した。図2にこれを示す。横軸は、それぞれの語句を書いた人数比である。図2より、参加者は研修を通して多様な知識・能力・技能・態度について内省していることがわかる。4章ではこの結果を参考にして、研修の教育目標を明確に設定する。

注目すべきは、全員が英語力向上への意欲に

ついて述べ、半数が異文化への関心と学びに対する積極性について記述している点である。この結果は、参加者たちが海外へ出て、異文化を目の当たりにし、肌で感じ、非日本人と英語で交流する経験を通して、異文化に対する興味が深まり、英語力の必要性を実感し、英語力向上の欲求がわいたことを示している。要するに北米研修の効果の一つは、英語力向上と、異文化知識獲得の動機づけと言える。これは国際性啓発の目的に沿った望ましい効果である。

また、多様な側面における積極性について言及した参加者が多かったことも喜ばしい発見であった。特に、本研修が5割の学生にとって積極的な学びの動機づけとなったことが明らかになったことは、大きな収穫である。

北米企業研修の特徴である日米の企業比較調査、企業訪問については、3割の参加者が関心の高まりや、さらなる知識獲得について述べて

いる。事前研修で日米企業比較をペアワークとして行ったことに関しても、事前調査が役立った、次回はもっと詳細な調査を行いたい、などの意見が書かれており、事前の調査から研修中の企業訪問の連動が功を奏していることが窺える。一方で、「英語力の不足」により、「貴重な講義やプレゼンテーション」の多くを理解できなかった、という意見も少なからず見られた。知識や経験の消化不良、そこから生じる探求心やチャレンジ精神の低下は、あってはならないと思う。この点は今後の課題としたい。

それでは、英語力についてどのような内省をおこなったのか、参加者のレポートをもとに考察していく。以下に、参加者6名の英語力向上に関する記述を例示する。

英語圏のかたにも、自分の意見を英語でなんでも言えるようになりたいと思いました。発音の大切さも身にしみました。単語はわかっているけど伝わらないことがあったので発音もしっかり覚えようと思いました。(T.N.さん)

自身の英語における語学能力を向上させることと、それを身に着けるために努力できる意識が必要であると感じた。また、自分はまだまだ単語などの知識が不足していることが今回の研修の中で感じられた。従って、今後は日常的に英語を学習していき、ネイティブの方が普通に喋る英語が聞き取れて理解できるようになるレベルを目指そうと考えた。(T.T.さん)

今回の研修で英語が話せないと自分の気持ちを半分も伝えることができず、言葉が伝

わらないというのは、こんなにも意思疎通が難しくなり、人間関係を形成するのがさらに困難に感じるのだと強く感じた。英語は国際化の中で必要不可欠であり、英語を理解することによって、海外のより多くの人の考えを理解することが出来るようになって感じ、英語と真摯に向き合う必要があると感じた。(A.O.さん)

英語のスキルが足りていませんでした。また、英語は私にとって第二言語なので話を聞き取るにも集中力が不可欠だと感じました。[...] 私が将来、起業した際に英語でビジネスが出来るまで習得したいと考えています。(T.S.さん)

日本のような島国にいと、英語はできなくても支障はないけれど、NYにでてみて、英語ができないと生きていけないし、せっかく他国の人も通じ合える鍵が英語なので、勉強しようと思いました。また、自分が質問した時も、先生の言うこと(答え)の大半を理解できなくて、悔しい思いをしました。(R.S.さん)

実際にアメリカに行ってみて感じたことは自分の英語力の足りなさであった。簡単な会話ならできるのであるが企業などの説明されている内容がなんとなくしか理解できないということが悔しかった。(Y.A.さん)

これらの記述が示唆する重要な点は、研修を通して参加者が①自分の英語力不足を認識できたこと、②さらに努力して英語力を向上したいと

感じている、ということだ。なぜ、通常授業では実感できなかった英語力不足が、学外研修では実感できたのか。彼らのレポートを分析すると、実際に社会に出て生の英語に触れて経験した「悔しさ」と「ピンチ」が要因となっているという可能性が浮かび上がる。

それでは、具体的に英語のどのような技能を強化する必要があるのだろうか。英語の知識・技能に関する語句の使用を分析したところ、以下ようになった。

スピーキング 5名

語彙力 3名

リスニング 3名

発音 2名

この結果より、参加者は会話における技能の不足を実感したことが窺える。これも学外研修の重要な効果である。

次に、参加者の英語力向上に対するモチベーションに関する記述を例示する。学生の視野が広がり、自分なりに努力の道筋を考えていることがわかる。

より多くの人と交流し、より多くの人のお役に立ち、自分の世界を広げるには英語が話せることが重要だと思うようになりました。それに、英語をすらすら話せたらカッコいいです。今まで英語を避けてきたので、逃げずにちゃんと向き合いたいと思います。(K.Y.さん)

英語は日頃から触れなければ話すことも聞くこともできないと思う。そのために英会話スクールに通ったり、英会話の教科書を買って勉強したり、とにかく英語に触れあう時間を増やしていこうと思いました。

(T.K.さん)

苦手だからやらないではなく苦手だからこそやるという考えにチェンジし、英語の勉強をしていきたいと考える。まずは英語に触れる機会が少ないので増やしていこうと思う。例えば、洋画の映画を今までは吹き替えで見ていたのをそのまま英語で見る。また英語の本も読んでみようと思っている。(S.Y.さん)

また、使用頻度の高い「積極性」については、以下のような記述があった。レポートからは、ほとんどの参加者が、自分がどのような側面において積極性が欠如しているのかを認識できたことがわかる。そして、改善策についても内省していることが窺える。

世界の動きをもっと知ること、積極的に興味を持つことが必要だと感じた。(A.O.さん)

英語で会話をする際における積極性も必要であると感じた。(T.T.さん)

英語がわからないと一歩ひいてしまうことが多かったが、何か言えば伝わる、ということがだんだんわかってきた。そのため、様々なことに対する恐怖心を捨てることが必要だと感じた。そして、何事も積極的に行動したらよいと思った。(K.M.さん)

今回初めて海外へ行き、外国の文化を直接感じたことが、私にとってとても新鮮で、私の知らなかった世界が広がったような感

じがしました。やはり、テレビや雑誌などといったメディアからでは得ることができないものがあるのだなと実感しました。そして、そのメディアからでは得ることのできない直接文化を感じる事が私の世界観を広げ、成長するために必要だと思いました。そのためにも、ずっと日本に閉じこもらずに積極的に海外へ文化を体感しに行くべきだと思います。(Y.K.さん)

また、「来年も参加したいと思いますか？理由も述べてください。(金銭的な制約が無いとした場合)」という問いには、2名を除く14名が「はい」と回答した。その理由を以下に例示する。

来年も参加することによって自分が以前参加した時と比べどのくらい英語ができるようになったか確かめてみたいからです。それと、NY研修に行ったら海外で働いている日本人に、色々質問をしてみたいと思ったからです。(Y.K.さん)

(参加)したいと思います。まず今回の研修が私にとってとても刺激的だったからである。初めて海外に行き日本語が通じない世界で過ごしてみて、もっともっと英語を勉強して会話をしたいと強く思ったし、海外の人のフレンドリーさが私はとても素敵だなと感じた。海外で長い期間暮らしたいとも思った。来年は英語を喋れるようになって、たくさんの人とコミュニケーションをとりたかったから。(S.Y.さん)

来年も参加したいと思う。理由として、今

回の研修では気付けなかった新しい発見が出来るかもしれないから。(Y.M.さん)

今回と同じ内容だとしても一年での自分の勉強の成果がわかるだろうし、まだニューヨークで学ぶべきことはあると思うから。(K.H.さん)

今回の研修の企業訪問での悔しい思いを(晴らしたいし)、自分の英語がどこまで成長したのか、来年の研修で挑戦してみたいと思います。(T.S.さん)

今回感じた英語力不足を補い、どのくらい今回とは理解に違いが出るのか、またコミュニケーションを今回よりも少しでも多く取れるようになった場合、今回とはどのように違う発見ができるのかということを知りたい。(Y.A.さん)

来年までまた英語を勉強して、テストでは得られない成果を感じたい。(T.N.さん)

今回の研修で自分が見たものはまだほんの一部なので、次の目標は、今回の研修より事前学習をしっかりと、行動計画もしっかりと立てて、たくさんを経験し、多くの文化に触れて、プラスになるものをたくさん吸収して帰国できるようにしたいです。(K.S.さん)

上述の回答が示唆しているのは、参加者が、①学外研修は「発見」や「学び」の場であると認識したこと、②努力して自分の能力・知識を高め、研修に再チャレンジし、自分の成長を実感

したいと考えている、ということである。

最後に、4名の参加者が、将来外国で働くことに対する興味や意欲が高まったことに言及していることを報告する。これは北米企業研修ならではの大きな効果であろう。

4. 3つの学外研修の教育目標

本章では、3つの学外研修を正課の英語科目と照らし合わせ、明快な目標の設定を試みる。もちろん3章で考察したレポートの分析結果も反映する。そして最後に、正課と正課外教育の潜在的な関係の可視化を試みる。

4.1 研修の教育目標設定のアプローチ

はじめに、教育目標を設定する上で考慮すべき点を述べる。3つの学外研修の教育目標は、文教大学の建学精神「人間愛」と、学部の教育目的「人間尊重の経営を理解し実践できる知識と技術を涵養する」に則って設定する必要がある。さらに、教育目標設定のアプローチについても考慮する必要がある。アメリカでは従来、科目やその内容をもとにカリキュラムを構想し、履修した科目の種類や取得単位をもとに学位授与してきた。これは content-based または discipline-based education と呼ばれる教育であり、日本の大学教育もこのアプローチをとってきた。一方、近年アメリカで注目されているのは competency-based education (CBE) と呼ばれるアプローチで、カリキュラムで指定したコンピテンシー（知識や技能とそれらを支える価値観や信条などの総称 (Chambers, 1993)）が達成された時点で学位授与を認めるものである。このアプローチの強みは、修業年限を設定する必要がない為、各自のペースで学習を進め

ることができるという点である。したがって、効率よく短時間で卒業する者もいれば、家庭や仕事と両立しながら時間をかけて学位取得を目指す者もいる。このように多分野で汎用的な能力をコンピテンシーと定義し、その育成を教育目標としてカリキュラムを開発する取り組みは、世界的な潮流となっている (e.g., 国立教育政策研究所, 2013; 松下, 2010)。こうした風潮を受けた日本でも、教育目標や内容は、科目別の知識・技能のみならず、教科横断的な資質・能力や、社会生活を視野に入れた資質・能力をもとに設定する必要性が論じられるようになってきている。

筆者は、経営学部の正課外カリキュラムにもこうした世界的な動きを少しでも反映させたほうが良いと考え、3つの学外研修の教育目標は、コンピテンシーのリストとして設定を試みる。なお、コンピテンシーの概念は多様な分野（医学、教育学、心理学、人的資源管理、戦略的経営など）において注目され、いくつかの定義があるが、本稿では「特定の活動やタスクを上手く遂行するために必要な知識、技能、態度、価値観、ふるまい」(Morris, et. al., 2013) と定義する。

4.2 育成すべきコンピテンシー顕在化

学外研修の目標設定に先立ち、正課の英語授業と比較対照しながら、各研修で育成できるコンピテンシーを洗い出す。

正課の英語教育では、1) 語彙力（語彙を聞いて理解し、話したり書いたりして伝える力）、2) 4技能（話す・聞く・読む・書く力）、3) 異文化および異文化間コミュニケーションに関する知識、4) 英語で自由に表現し、発表・伝達する能力、そして5) 上記1～3の知識を

IT上で運用する能力を強化している。

正課外の「英語・英国文化体験研修」(BH研修)では、正課英語教育で強化した能力を、実社会で活用する場を提供する。2015年度の参加者が具体的にどのような経験をしたのかと言うと、英語でホテルにチェックイン・チェックアウトし、日本円とBritish Hillsポンドを換金し、売店で量り売りのキャンディーを買い、レストランで注文する等、海外旅行で実際に発生しうるタスクであった。これらに加えて、ネイティブ講師によるコミュニカティブで学生中心のレッスンを5つ受講した。こうした体験を通して個々が伸ばせるコンピテンシーを以下に示す。

- 1) 環境認識力(非日本的な環境について分析し、思考し、理解する力)
- 2) 会話における積極性(講師、スタッフ、他の参加者との会話を進んで行う力)
- 3) 異文化交流における柔軟性(意見や立場の違いを理解し臨機応変に対応する力)
- 4) 英国文化(習慣、マナー、建築様式など)に対する知識・関心
- 5) 海外旅行タスク遂行力(チェックイン、換金、買い物、注文など)

「Advanced Program」(AP研修)では、正課英語教育とBH研修で強化したコンピテンシーを活用・応用する機会、ビジネスに関する知識を題材とした授業を英語で受ける機会を提供する。AP研修で育成できるコンピテンシーを以下に示す。

- 1) 専門科目のレクチャーを英語で受け、授業内の課題や、質疑応答、双方向のアクティビティも英語で試みるなか、自分の限界を超えて学び・考え・発信しようとする

「積極性」や「チャレンジ精神」

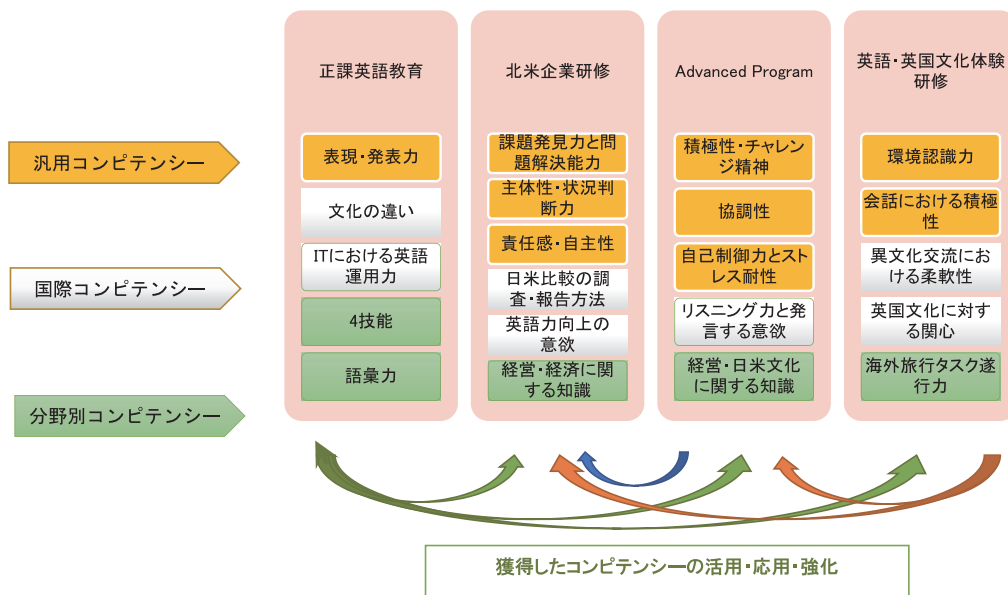
- 2) 正課の授業では出会ったことのない問題に直面した際に、仲間と助け合い・励まし合いながら解決しようとする「協調性」
- 3) 学外で英語と専門のブートキャンプという非日常的环境における「ストレス耐性」と「自己制御力」
- 4) 英語レクチャーを聞いて理解する力と、授業中に英語で質問や発言をする積極性
- 5) 経営・経済・日米文化に関する基礎知識

そして北米研修では、上述の正課教育とBH研修、AP研修で強化したコンピテンシーの全てを、仲間との共同作業・海外生活・企業訪問を通して活用する。本研修で強化できるコンピテンシーを、以下に示す。

- 1) 事前研修・海外滞在中の共同作業における課題発見力と問題解決力
- 2) 金融・経済の中心ニューヨークで安全に有意義な時間を過ごすための主体性(計画性や実行力を含む)・状況判断力
- 3) 海外渡航に必要な手続きや、研修の任務に対する責任感と自主性
- 4) 日米を経営・経済・文化的に比較調査するスキル
- 5) 英語力向上の意欲
- 6) 経営・経済に関する基礎知識

3章で考察したレポートの分析結果では、「英語力向上に対する動機づけ」が最も顕著な研修効果であることが明らかになった。その要因は、通常授業とは異なり、実際に異国文化において生活し、研修を受けることで、①悔しきやピンチを経験し、②英語力不足を実感したことと考えられる。おそらく英語の力を伸ばしたい

図3. 正課×正課外教育の教育目標（=育成すべきコンピテンシー）と連動性



という意欲は、他の2つの学外研修においても高められるであろう。しかし、唯一渡航が含まれる北米企業研修は、この意欲増進効果が最も高いと仮定できる。よって、差別化を図るためにも、北米企業研修のみ「英語力向上の意欲」を目標の一つとする。

以上が正課英語科目と正課外の学外研修で育成すべきコンピテンシーの洗い出しである。

5. 正課×正課外の教育目標と連動性

本章では、上述の教育目標設定のアプローチと、洗い出したコンピテンシーをもとに、正課・正課外教育の教育目標と連動性の可視化を試みる。

図3に、正課の英語教育と3つの学外研修を並べた。最も左の正課英語教育には、1-3年時までの必修英語科目が含まれる。右側2つは本稿執筆時点では完全に正課外の研修である。

2016年度より正課科目の一環となる北米研修は、正課と正課外研修の間に配置した。それぞれの教育目標は、図3にリストしたコンピテンシーの育成とする。コンピテンシーは、3種類に分け、異なる色で示した。緑は、各分野の特徴を生かして育成する「分野別コンピテンシー」、白はそれぞれに共通する国際性啓発という目的を意識した「国際コンピテンシー」、オレンジの「汎用コンピテンシー」は、科目や研修を超えて活用・応用が可能なものとした。

さらに、各分野で獲得したコンピテンシーを、学生がどのように他の授業や研修で活用・応用・強化できるのかを考察する。図3の矢印は、コンピテンシーの活用先を示している。例えば、1-3年次の正課英語教育で身につける語彙力、4技能、表現力、ITにおける英語運用力などは、1年次推奨のBH研修、2-3年次推奨のAP研修、2-3年次推奨の北米研修において存分に活用・応用・強化できる。一方で、学外研修で社会との関わりや仲間との共同

作業を通して身につけた国際コンピテンシーと汎用コンピテンシーは、2年、3年次の正課の英語授業で役立つはずだ。また、全ての学外研修に順序良く参加することで、各研修で身につけたコンピテンシーを次の研修でさらに磨き、深めることができるであろう。

6. まとめ

大学の正課外教育（または準正課教育）の充実と、正課と正課外の密接な連動の「見える化」が重要視されている。2014年開設の文教大学経営学部においても、多様化する学生の個性や能力や需要に対応する為、様々な正課外の教育プログラムが整備されてきた。しかし、各プログラムの教育目標設定は明確になされているとは言い難い。また、正課と正課外教育の密接な連動の「見える化」は手つかずの状態であった。

そこで本稿では、まず学部生の国際性啓発を目的とした正課外の学外研修に焦点を合わせ、筆者が整備・実施に携わった「英語・英国文化体験研修」「アドバンスト・プログラム」「北米企業研修」について概略を述べた。続いて「北米企業研修」に的を絞り、研修後に学生に課したレポートを分析することで、正課外の学外研修の効果や重要性を明示した。さらに、この結果を踏まえ、3つの学外研修を正課の英語科目と照らし合わせ、明快な目標の設定を試みた。そして最後に、正課と正課外教育の潜在的な関係、すなわち連動性の可視化を試みた。

学外研修は、正課外ならではの自由な教育プログラムに創り上げることが可能である。国内で英語漬けの環境を提供することも、海外に渡航して教室では決して味わうことのない本物の

「悔しさ」や、安全を確保したうえでのちょっとした「ピンチ」を経験させることもできる。英語が伝わらない「もどかしさ」や、どうしてもっと英語力を鍛えてこなかったのかという「後悔」、これからは努力しようという「意欲の高まり」、「カルチャーショック」など、学外での教育プログラムならではの効果は、想像以上に大きいことがわかった。

従来、正課外の教育は、正課教育を補完するものとして考えられてきた。しかし、型にはまらない正課外の教育は、学生が社会の一員として生きていくスキルを育成する理想的な場である。グローバル化が急速に進んだ現代社会において、本稿で取り上げたような正課外教育は、より重要性を持つであろうし、さらなる展開と活性化が必須となるであろう。ただし、正課外教育は「正課の授業内容と社会との関わり」を学生に実感させることを目的としていることを決して忘れてはならないと思う。

Acknowledgement

I would like to express my sincere gratitude to Prof. Yamazaki and Prof. Suzuki for their immense knowledge and insightful comments. Also, I must thank the Faculty of Business Administration for providing funding to organize co-curricular camp activities and work on this paper.

参考文献

- Bentley, K. (2010). The TKT Course CLIL Module. Cambridge English.
- Chambers, D. W. (1993). Toward a competency-based curriculum. *Journal of Dental Education*, 57, 790-793.

- Morris, M. H., Webb, J. W., Fu, J., & Singhal, S. (2013).
A Competency-Based Perspective on
Entrepreneurship Education: Conceptual and
Empirical Insights. *Journal of Small Business
Management*, 51 (3), 352-369.
- 池田真 (2014). 2013年度講演会記録 上智大学の
実践：[内容言語統合型学習 (CLIL)] が切り拓く大
学英語教育の可能性. 外国語教育フォーラム：金
沢大学外国語教育論集, (8), 59-68.
- 大澤敏 (2015) 「正課×正課外の連携による総合力の
育成—金沢工業大学の学修スタイル—」『大学時
報』, 364, 56-63.
- 国立教育政策研究所 (2013) 「社会の変化に対応する
資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」,
『平成24年度プロジェクト研究調査研究報告書；教
育課程の編成に関する基礎的研究報告書5』.
- 松下佳代 (2010). 「〈新しい能力〉概念と教育—その
背景と系譜」松下編『〈新しい能力〉は教育を変え
るか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネ
ルヴァ書房.
- 村田晋也・小林直人 (2015) 「正課教育、準正課教
育、正課外活動：「愛大学生コンピテンシー」の育
成のために」『大学時報』, 364, 50-55.
- 文部科学省高等教育局 (2000) 「大学における学生生
活の充実方策について - 学生の立場に立った大学
づくりを目指して -」(報告), [http://www.mext.
go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/
000601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm)



The Importance of Co-curricular Camp Activities

Michiko Toyama

Faculty of Business Administration, Bunkyo University

✉ toyama3@shonan.bunkyo.ac.jp

Received 16 November 2016

Abstract

There is a growing recognition that universities should provide not only strong academic knowledge and skills but also opportunities to develop the range of skills and attributes that are important for graduates. This is why improvement or creation of co-curricular activities has been attracting a lot of interest since they complement academic curriculum by offering true and practical experiences outside a typical pen and pencil classroom. Also, it is becoming extremely difficult to ignore a connection between academic curriculum and co-curricular activities.

In this paper, three co-curricular camp activities that aim to enhance students' global skills and cultural awareness were reported first. The camp activities were organized for students of the Faculty of Business Administration of Bunkyo University, and the author is involved in the projects to organize them. Next, results of an open-ended questionnaire, which was conducted after one of the co-curricular camps, were analyzed to reveal the importance or values of such camp activities. Then, based on the findings of the analysis, the author tried to set specific educational objectives for each co-curricular camp activity as they have been conducted without definite objectives. Finally, the connections between the academic curriculum and the co-curricular camp activities offered by the faculty are examined and visualized.

Keyword : curriculum, co-curricular, competencies, global skills, cultural awareness

Faculty of Business Administration, Bunkyo University

1100 Namegaya, Chigasaki, Kanagawa 253-8550, JAPAN

Tel +81-467-53-2111, Fax +81-467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>

経営論集 Vol.3, No.3

ISSN 2189-2490

2017年3月28日発行

発行者 文教大学経営学部 坪井順一

編集 文教大学経営学部 研究推進委員会

編集長 鈴木誠

〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

TEL : 0467-53-2111 FAX : 0467-54-3734

<http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/>